

# 宮島詠士の書法形成について

寺尾 賢明

## ◇宮島詠士について

宮島詠士（一八六七～一九四三）は、名を吉美、字を詠士、号を詠而帰廬主人、通称を大八といい、山形県米沢に生まれた。十一才のとき、父宮島誠一郎の勧めで勝海舟に学び、明治十四年から明治十七年までの約三年間、旧東京外国語学校で中国語を学んだ。更に同二十年から七年間（途中帰国を含む）、張廉卿（一八二三～一八九四）に師事して、経義・文章・書法を学んだ。帰国後は、東京帝国大学文学部講師、東京外国語学校講師を務めたが官の禄を食むことを拒んで辞し、詠帰舎（後の善隣書院）を開設して終生中国語教育に従事した。そして中国事情に精通し、日中友好に尽力した。

尚、その書は師法と張猛龍碑で鍛え、漢魏・唐の諸法を涉猟し、清冽な書風をもって異彩を放っている。

## ◇研究の動機と論点

近年では宮島詠士の書作品が高等学校の教科書をはじめ、広く書道関係の書籍に取り上げられており、その評価が日増しに高まってきている。そして、神戸大学助教授魚住和晃先生の『書論第二十三号』『宮島詠士「人と

芸術』をはじめとする著書・論文・図録によって、詠士の書法とその人間性についてかなり明確に説明されてきている。（宮島家に残る張廉卿、詠士の墨跡を図版化したり、詠士の中国留字中の書簡を解明した）しかし、詠士の明治・大正に書かれた書作品について明確に研究されていないため、詠士書法を知る人の多くが、詠士の昭和期（六〇代）に書かれたもの（とりわけ佐藤氏念祖碑）などに魅了され、詠士書法の頂点と思い込んでいるところがある。

従って、今回の論文ではこのような思い込みによって、詠士の書を判断するようなことを見直すため、

①詠士の唯一の書友であった犬養木堂（一八五五～一九三二）の張廉卿書風への私淑を探り、詠士の書法形成とのかかわりを考察した。

②詠士の年代別書風（猷砲彈碑「三〇才」から犬養公之碑「七五才」までの墓碑書の字形分析、真筆の年代別区分）によって、詠士書法の変遷のまともを試みた。

一 犬養木堂と宮島詠士の書法形成とのかかわり

犬養木堂（一八五五—一九三二 名は毅）は、近代日本の政治家として巨大な足跡を残したことは誰もが知るところであるが、学問技芸に秀でた文人政客としての一面があった。特に書道においては、張廉卿を好んで一機軸を出し（図1）、専門書家も及ばぬ作品を残している。また、宮島詠士が書道の交歓を背じた唯一の邦人でもあった。

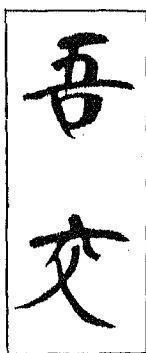
木堂の張廉卿書風への私淑は、まず犬養道子女史の

『日本人の記録・犬養木堂』（昭和四十四年の毎日新聞に一年間連載）の記述に木堂は「現代の支那（の書道家）では、まず康有為」「（木堂と康有為は）政治のことを忘れて筆墨から書物の話をした。」「木堂は趣味・趣向の点において、康有為にただならぬ親近感を抱いた。」とあり、康有為（一八五八—一九二七 清朝末期の革命家で、明治三十一年に日本に亡命して来た。また『広芸舟雙楫』の著者で張廉卿の書を絶賛した）からの影響によるところが非常に大きいと思われる。また木堂が張廉卿書風に私淑していく過程は、

①張廉卿の書を目習いする機会を得ることが不可欠であった。（木堂は目習いによって、自己の書を開拓していった）

②張廉卿の書作品の数がとても少ない。（当時では、張廉卿の作品を所有していたのは宮島詠士だけだったかもしれない）

図1 張廉卿



木堂

図2 康有為

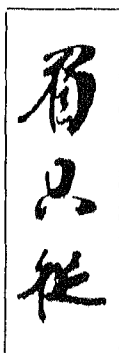
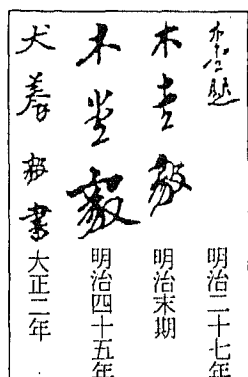


図3



③康有為の書が張廉卿の書風とはまったく異なる。

（図2）

のような状況から、宮島詠士との交流があつてこそ、図3のように明治末期頃から張廉卿書風に私淑できたのではないかと思われる。

このように木堂と詠士のかかわりについては、資料が乏しいため仮説と想像に頼るところが大きい。しかし、その中でも犬養道子女史の『日本人の記録・犬養木堂』は、木堂と康有為とのやりとりを記述した極め



て貴重な文獻であ

り、康有為からの

影響による張廉卿

私淑説の重要な根

拠と言えよう。そ

して詠士もまた明

治末期以降（橋本

君碑揮毫以降）長

足な書法の進歩を

遂げることになる

が、そこには少な

からず木堂とのか

かわりがあり、犬

養公之碑が物語るように（詠士と木堂は互いにどちらかが死んだほうの墓誌を書こうと約束しあっていた）、共に書を競い合う仲であったはずである。

尚、図4は木堂と詠士の肉筆の一部を張猛龍碑と比較したものであるが、両者の用筆法はまったく異なるものの字形の取り方は張猛龍碑と非常によく似ている。

## 二 詠士の年代別書風の特徴

詠士の墓碑書を中心として、年代別書風の特徴について述べることにする。

### （一）師風への傾倒と離脱

#### ◇猷砲彈碑

猷砲彈碑は明治二十九年（詠士三〇才）に選書された。詠士が書丹した墓碑書の中では最初のもので、勝海舟の計らいによって詠士が書丹者に抜擢されたといわれている。広島市宮島町三笠浜にある。

猷砲彈碑の字形は横画に水平感があり、張廉卿独特の外方内円の転折が盛んに用いられているため、碑の全体観としては師風に徹した印象をもつ。（魚住和晃氏の説に同調する）しかし、図5の「有」「海」「軍」「鎮」にみられるような波磔や、図6の「不」「以」「於」

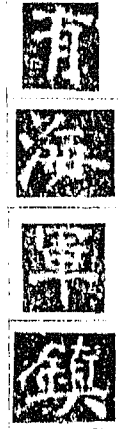
「終」「敵」のような長い右払いなど張廉卿にはみられなかった特徴がある。また図7の「年」「痛」「濟」のような点強調の文字や、「慨」のような文字も詠士独特のものである。このように猷砲彈碑の字形は師風に徹しながらも、詠士特有の感性が働いている。

### （二）師風からの脱却

#### ◇橋本君碑

橋本君碑は明治四十四年二月（詠士四五才）に書丹されたものである。六メートル余もある巨碑で、東京都港区の長谷寺にあったが、遺憾ながら戦時中にその半分が大破し、戦後取り壊されてしまった。現在は宮島家に拓本が残るのみである。尚、『詠翁道話』によると橋本君碑は詠士が揮毫した墓碑書の中では「いちばん忠実に彫っ

図5



である」  
とのこと  
である。

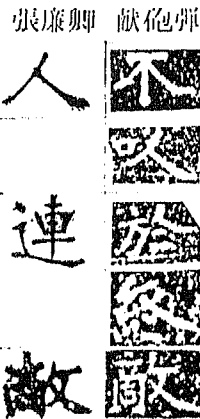
(井龜泉

という名

人が彫っ

た)

図6



橋本君  
碑の字形  
は、まず  
図8の

「君」

「東」

「有」

「功」

図7



「以」「在」のような伸びやかな左払いが最も顕著な特徴としてあげられる。そしてこの左払いの線は、起筆から収筆までの線の太さがほぼ均一で、曹全碑の「功」「在」や「父」、孔宙碑の「功」の左払いとよく似ている。しかも張猛龍碑の直線的な左払い「金」「禽」とは異なる。一方、図9の右払いもまた「以」「受」「欣」「本」のように右払いの払いの部分が短いものが多い。次に図10のような独特の形をとっている文字が「日」「自」「國」「醫」「齒」などあるが、これは乙瑛碑の

「酒」「書」「言」に見受けられるような骨格である。

実際、詠士が『どのような隷書の古典を学んでいたか』は定かではないが、『詠翁道話』の「漢隸を座右に置け」というところから察して、乙瑛碑、孔宙碑、曹全碑のようなものを習練していたように思われる。そのほか図11の「教」「殷」「使」「陞」「婦」のように偏と旁の構造に特徴のあるものや、図13の「泣」「治」「無」のように点強調された文字がある。更に「治」「無」の字においては張猛龍碑の字形を隷書化したような感じがする。このように橋本君碑の字形は、隷書の様式を取り入れたことによって、張廉卿の篆書を母体とした静止的な書風を打ち破り、力学的均衡によるものが加わった躍動的な書風を打ち出すことに成功している。(魚住和晃氏の説に同調) また橋本君碑の横画の起筆には、図12の「王」「十」のようにピンと横に鋭く飛び出たものや、「其」「盟」「貴」の横画のように起筆が左下の方に突き出したものがあるが、このような起筆の書き方は書道史の上でも例のない書き方である。

### (三) 書法の完成

#### ◇小森沢長政君墓誌

小森沢長政君墓誌(東京都青山霊園)は『梁何の歴』に紹介されたのみであるが、その書風は北魏楷書に通ずるような力強さがあり、詠士の書法形成においても重要な位置を占めていると思われる。詠士五一才、大正六年

図12



図11



図10

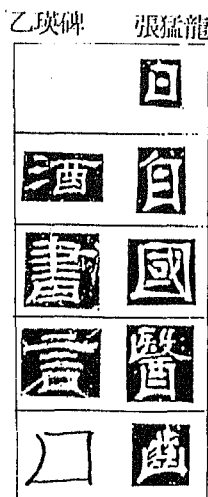


図9



図8



図13



五月に選書されたものである。

小森沢長政君墓誌の

字形には、図14の「小」

「八」「大」「長」

「森」のような思い切っ

た右払いや、図15の

「生」「土」「位」

「歿」「年」のように文字の中心から右への広がりをもちたものがある。(図14と図15を併せて左狭右広型のものが多い) また、図16の「于」「天」「五」「有」のように横画の起筆を一旦、真下に鋭く線を区切る書き方をしているのは、小森沢長政君墓誌が最初のものである。

このように小森沢長政君墓誌には、橋本君碑のような隷書臭さはない。そして詠士の書風は小森沢長政君墓誌を堺にいよいよ完成度を増していく。

◇楷書の確立と行書の出現

『全書景云』詠士先生こぼれ話)において市原秋芳氏(宮島詠士の弟子)が、「宮島先生は既に大正七、八年頃硬軟両様に書き分けられていた」といっているように詠士の書法は大正中期頃に確立されたように思われる。

特に大正九年の作品について言えば、楷書、行書のあらゆる形式(細字・中字・大字)の書作品が登場する。

まず、図17の大正九年正月に書かれた「杜甫詩 和裴迪

図14



図15



図16



登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」の習作は雄渾の筆致で書かれており、北魏楷書のような骨格を持ちながらも、随所に点画を省略した行書を交えた楷行体である。そして図18はそれを後に清書したものと思われるが、習作には見られなかった左払いを強調し、文字構造を向勢に構え、懷を広くとり、作品全体がゆったりと大きく見える。しかも線質は春風になびく乙女の長髪のような軽やかさを感じさせるが、実際、真筆はかなり厚い紙に書かれており、まるで深い湖の底を見つめているような『線の深さ』を同時に秘めている。

また、この年に書かれた条幅作品として、まず図19の「七言絶句」と、図20の「陸游詩」のような楷行体がある。「陸游詩」の方は字間を詰めることによって行間を

すっきりさせ、流暢な美しさを醸し出しているのに対し、「七言絶句」の方は字間をあげ、大胆な左払いと、文字の懷を広くとることによって作品を大きくみせている。更に図21の「重憲遵法」と図22の「嚴武詩」の楷書であるが、「嚴武詩」の方は全紙に四行に書かれたもので、背勢と向勢を巧みに織り交ぜ、行意をもった楷書にまともめている。また、「重憲遵法」は半切大の大字で、一面のごまかしもなく重層なタッチで書かれている。

このように大正九年の書作品は字形が安定し、表現の幅が広く、明らかに詠士書法が確立されたことを示している。しかもこの頃の書作品は、肉太で、躍動感に満ちあふれた力強い線質が大きな特徴である。更にこの詠士書法は翌年の高橋景羽墓表、翌々年の長谷川辰之助（二葉亭四迷）墓表の墓碑書において大きく花開くことになる。

#### ◇高橋景羽墓表

高橋景羽墓表は森鷗外の撰文で、大正十年三月、詠士が五五才の時に書丹したものである。その書風は『剛健飛動』の筆致で、北魏楷書を彷彿させるものがある。岐阜県安八郡神戸町の神護寺善字院にある。

高橋景羽墓表の字形の大きな特徴は、まず多彩な左払い図27「入」「友」「女」「娶」「戸」「君」「弟」「琴」「居」「墓」があげられる。次に図26の「日」「國」「圖」のように乙瑛碑のような骨格をもったもの、

图 17

东园官梅勤诗典还知何迹  
 扬州州城时勤雪道和德迹  
 若逢春可自由幸不折来傍  
 一枝香若为春去乱州巷江道  
 一柳香一瘦柳夕催人自白頭  
 社工部之诗之妙莫有无可  
 忌議者往山此  
 庚子正月 休耕山人 謹題

图 18

東園官梅勤詩典還知  
 何迹在揚州此時勤雪道  
 相憶送若逢春可自由  
 幸不折不傷我來若為  
 若去亂柳巷江道一柳  
 香一瘦柳夕催人自白頭  
 庚子正月 休耕山人 謹題

图 19

困中金桂雨初香窓外石栖紅帶  
 霜今日紫微花已老無人更問紫  
 微郎  
 庚子仲秋前夜日 休耕年堂主人

图 21

# 重憲遵法

小西君為  
 吉庚申秋  
 休士

图 20

此乃丁卯公家事快開景情現情在平山天遠大矣  
 今月朱銘已為平人允晴休即因是內族方呈轉而方未  
 至此也吉乃白面書 庚子年平是江外人矣 沈源入卷能似此  
 快情主人元是知此書出聲聲物向應中推年卷主領下是  
 妙更小西三下七步新能失此身是具是去州 庚子年  
 庚子仲秋前夜日 休耕年堂主人

图 22

昨夜秋風入玉關初雲  
 遙月滿西山更催飛將  
 驅馬房英造沙場且馬  
 休士

図28の「詩」「雄」「頗」「數」のように、偏と旁を齒車のように噛み合わせた高貞碑のような文字構造のもの、図24の「月」「簡」「稱」のような背勢の文字構造をもった文字などが特徴としてあげられる。更に図25の「四」「冒」「書」は台形を型ちどり、図23の「染」「農」などは今までにはみられなかった独特な形を醸し出している。

また横画の起筆の部分を考察してみると図29の「十」「士」「者」のようにガチンとしたもの、「吉」のようなたん瘤状のもの、橋本君碑同様に横に鋭く飛び出たものの「其」、「書」のように丸いものなどがあり、用筆法における多彩さと熟達ぶり（筆の開閉の巧みさ）が伺える。

このように高橋景羽墓表は、橋本君碑と似たような特色を母体としながらも、九成宮醴泉銘や高貞碑の特徴をうまく取り込み、点画の組み方にゆるぎがない。北魏楷書を彷彿させるような力強さの中に、品格の高さを秘めた大作と言える。しかも詠士の墓碑書の中で最も肉太な線質で書かれており、詠士書法の充実ぶりが伺える。

尚、上条信山先生（日展参事 宮島詠士の高弟）は

高橋景羽墓表は、宮島詠士の墓碑書の中では

最高の出来栄のものであろう。

と絶賛されている。（平成四年一月十七日）

#### （四）九成宮醴泉銘への崇拝

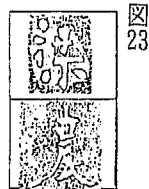
昭和に入ると詠士の書は、昭和二年に書かれた図30の「七言絶句」、昭和三年に書かれた図31の「七言絶句」、昭和五年に書かれた図32の「王昌齡詩」に見受けられるように大正九年頃の書風とは一変する。作品の全体観としては線質が甘く、字形が縦長で、文字の流れは流暢であるが、縦画や左払いが細く、勢いがなくなる。そして墓碑書の書風もまた、橋本君碑や高橋景羽墓表の頃とは一変する。

#### ◇根津山洲先生墓誌

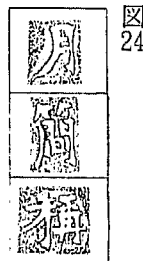
根津山洲先生墓誌は昭和三年二月、詠士六二才の時に選書されたもので、横浜市鶴見区総持寺にある。

根津山洲先生墓誌の字形の大きな特徴として、図33の「日」「月」「有」「育」「門」のような背勢の文字構造をもったものや、図34の「三」「千」「爾」「月」「皆」「議」のように横画の長さを極力押さえた、縦長の字形が多くなる。そして図35の「文」「設」「獲」のような右払いの長いものは見受けられるが、明治・大正期の墓碑書にみられた、たくましい左払いや、隸書の特徴をもったものは全くなくなり、横画の起筆も甘くなる。更に根津山洲先生墓誌以降の墓碑書は、明治、大正期に書かれたものと比較すると著しく縦に長い字形である。（詳細は後の『三 詠士の書法形成について』で説明する）





23

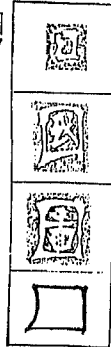


24

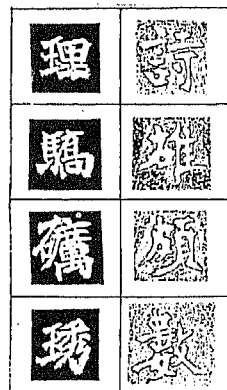
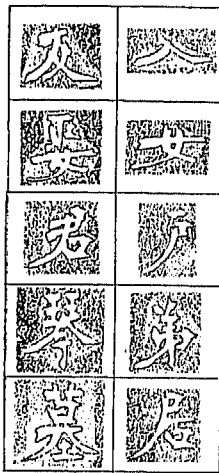
25



26

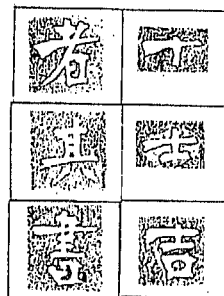


27



28

29



30

君王城上望，降旗盡在  
深宮。即得品四，乃人齊  
釋甲，宮無一獨走。另見  
不可與說。休歸。

31

琵琶起舞，換新聲。魏  
大，關山離別情，獨亂  
越聽，不盡高。秋月照  
長城。戊辰初冬，林士吉

32

寒雨連江夜入吳，  
明送客不洛陽。亂  
如相問一，片冰心在玉  
臺。戊辰初冬，林士吉

図33



図34

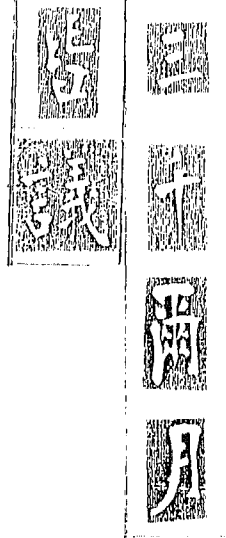


図35



◇墮淚之碑

墮淚之碑は昭和四年十二月、詠士六三才のときに書丹されたものである。今までその所在は岐阜県美濃市といわれていたが、新潟県寺泊町夏戸の小越正春氏の邸内にあることが確認された。その字形は図36のとおり九成宮醴泉銘によく似た字形が多数あることから、明らかに九

成宮醴泉銘がバックボーンとなっていて、ことがわかる。

尚、魚住和晃氏は墮淚之碑を「欧陽詢への接近」と評しているが、むしろ私は「九成宮醴泉銘への並々ならない崇道」と解釈したい。

◇佐藤氏念祖碑

佐藤氏念祖碑は昭和六年、詠士六五才の時に書丹されたもので、香川県牟礼町王墓次信墓地内にある。尚、その書風は一文字、一文字が端正に書かれており、整然とした趣がある。

図37は佐藤氏念祖碑と高橋景羽墓表を並列したものである。高橋景羽墓表と比較して、佐藤氏念祖碑の字形の特徴は、①「又」「米」「表」「農」「墓」にみられるように左払いがあまり長くない。②「故」「教」「数」「師」「雄」「鎌」のように偏と旁の組み合わせがゆったりしている。③「尋」「士」「舊」「傳」のように横画を押さえて縦画を長くしたり、「教」「孫」「謂」のように偏と旁の組み合わせに変化を加えたりして字形を縦長にみせている。そして、「孝」「好」のように「子」の部分の左ハネが短いものや、「處」のように洗練された形のものがある。また、図Aのように点画の組み合わせの部分に、透き間のある文字が多い。

このように佐藤氏念祖碑の字形は高橋景羽墓表と比べると、線質は深い、迫力が欠けるところがある。しかし、肩の力が抜けた、気張るところのないこなれた楷書であ

図 36

九成宮

十以九也内同年事帶可書食飲

墮淚之

十以九也内同年事帶可書食飲

九成宮

之水來家成我不有為身屋者於信

墮淚之

之水來家成我不有為身屋者於信

図 37

高橋景

又來表農墓故穀師雄鑑

佐藤氏

又來表農墓故穀師雄鑑

高橋景

又來表農墓故穀師雄鑑

佐藤氏

又來表農墓故穀師雄鑑

図 A

田農

り、詠士の技量の高さを感じさせる。尚、佐藤氏念祖碑は九成宮醴泉銘とはかなり異なった字形で、魚住和晃氏が書論で論じられている「歐陽詢への執着」というより、「九成宮醴泉銘からの発展」といった感じではないかと私は思う。

上条信山先生は佐藤氏念祖碑のことを  
とてもうまい。

と評されている。(平成五年四月一日)

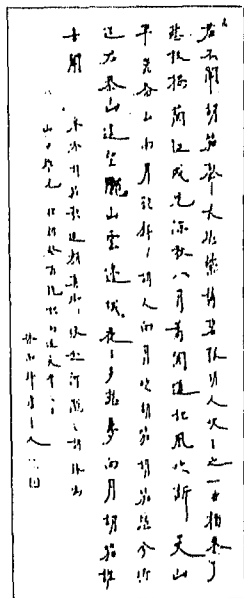
### (五) 九成宮醴泉銘への崇道②

詠士の書は、昭和八年に書かれた図38の「岑參詩 胡笳歌送顔真卿使赴河隴」にみられるように、晩年期に入ると一段と線が細くなり、作品全体に覇気が感じられなくなる。尚、このように詠士の書風に翳(かげり)が見え始めた要因としては、①健康上の問題(晩年の詠士は高血圧で苦しんでいた『詠翁道話』)、②昭和七年、五一五事件で犬養木堂が暗殺されたこと(書を競う相手がなくなった)、③満州事変(昭和六年)より、日本がアジア侵略への道を歩み出したことへの憂い(詠士には、一身を投げ出して国のことを心配する国士としての一面があった)などが考えられる。

### ◇晩年の墓碑書

詠士の晩年の墓碑書には昭和十二年八月、詠士七二才に書丹された洲崎吉郎君碑(新潟県柏崎市妙行寺)、昭和十三年三月、詠士七二才に書丹された四竈孝輔墓誌

図 38



(東京都多摩霊園)、昭和十五年十一月、詠士七四才に選書された三島神社鳥居名(静岡県三島市鳥居神社)、昭和十六年に完成された犬養公之碑(岡山市庭瀬町川入)の四つがあるが(『梁荷の歴』参照)、このうちの四竈孝輔墓誌と犬養公之碑の字形についてそれぞれ考察してみることにする。

まず四竈孝輔墓誌の字形の特徴は、図39の「人」「文」「從」「遣」「至」「年」「事」「為」「者」「同」「武」「如」「海」のように九成宮醴泉銘の字形によく似ているもの、図40の「明」「前」「國」「関」のような背勢の文字構造のものなどがあり、昭和四年に書丹された墮涙之碑同様に、詠士の九成宮醴泉銘への並々ならない崇道ぶりが感じられる。

次に犬養公之碑であるが、この碑は久米公氏(千葉大学教授)や魚住和晃氏の調査研究(『書論第二十三号』、『宮島詠士「人と芸術」』に掲載)から、推敲に推敲を

重ねた詠士最晩年の労作であることが明らかになっている。  
る。

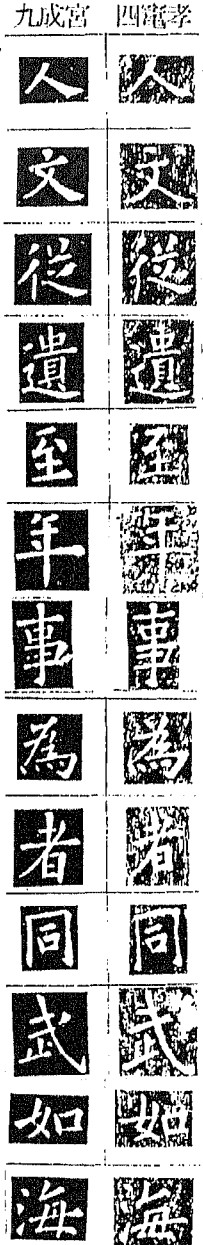
尚、その字形の特徴としては、図41の「天」「庭」

「發」「衆」などにみられるような右払いの払いの部分  
が異様に長いものや、図42のように極端に右肩上がりの  
強い姿勢のものなどがあげられる。尚、大養公之碑は詠  
士が書丹した墓碑のなかでは一番縦長の字形であり（詳  
細は後の『三 詠士の書法形成について』で説明する）、  
横画を押さえた、かなり右肩上がりの強い字形である。

また詠士は大養公之碑の書丹に際して、かなりの年数  
を費やしており（碑文中には昭和十一年十月とあるが、

『詠翁道話』によると昭和十三年四月に「大養公之碑の  
下書きが飾ってあった」、そして昭和十六年八月に「最  
近、大養公之碑が建立された」とある）、大養木堂に対  
する並々ならない感情があったように思われる。しかも  
大養公之碑の書丹を成し遂げたであろう昭和十四、十五  
年頃から詠士は軽度の半身不随で、血圧が一七〇〜八〇  
ミリの間であったと『詠翁道話』に記されている。大養

図39



公之碑には図43のようなバランスを失った、詠士らしく  
ない文字（「大」「聲」「學」）がいくつか見受けられ  
るが、むしろこのような不健康な状態で、きっちりとし  
た楷書を書こうとしたことの方が驚異である。

また、詠士の最晩年の真筆は図44の「頭巾氣象英雄志」  
図45の「孝者百行基」に見られるように、極度に右肩上  
がり強く、健康がすぐれないためか線質が歪んでいる。  
以上のように昭和期の詠士の書は、流暢な書風から、  
だんだん涸れていくという経路を辿るが、とりわけ真筆  
墓碑書共に字形が縦長で右肩上がりのものが多く、九成  
宮醴泉銘一筋に崇道した時期だったように思われる。尚、  
『詠翁道話』によると詠士の九成宮醴泉銘への崇道ぶり  
は次のようである。

九成宮は洪大無辺の傑作であるから、いくら打突かっ  
て行っても際限がない。こちらが進めば進むほど手  
本は遠くなる。近づけば近づくほど手本は大きく聳  
え立つ。いい加減の手本ならば直ぐ追付くから行き  
詰まってくる。

図40

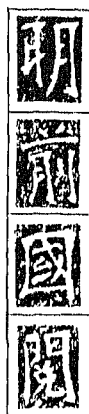


図41



図42



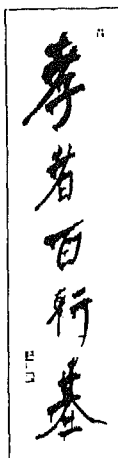
図43



図44



図45



### 三 詠士の書法形成について

詠士の書法変遷についてはこれまで述べてきたとおりであるが、ここでもう一度、詠士の書法形成のプロセスをまとめることにする。

#### ◇墓碑書の変遷からの考察

表1は(書かれた年代の早い順から)、A 献砲彈碑「二三四文字」、B 橋本君碑「四〇〇文字」、C 四電俵夫墓誌「二六八文字」、D 小森沢長政君墓誌「九八八文字」、E 高橋景羽墓表「四五七文字」、F 根津山洲先生墓誌「一四七文字」、G 墮涙之碑「三八七文字」、H 佐藤氏念祖碑「三二〇文字」、I 四電孝輔墓誌「二九四文字」、J 犬養公之碑「八六二文字」の字形(「一」の字を除く)の縦、横の長さを測り、縦と横の長さをそれぞれ合計して、縦の長さの合計÷横の長さの合計で、縦・横の比率(例一・一〇倍縦に長い字形)を概算で出したものである。そして、表2はさらにそれを棒グラフに表し、墓碑書の字形と照らし合わせ、表3は詠士の書法形成をまとめたものである。

この三つの表によるとまず、詠士は橋本君碑で隸法を巧みに織り混ぜ、「年」「有」「書」(表2)の横画の起筆にみられるような独特の用筆法を編み出すことに成功している。そして小森沢長政君墓誌で「年」「有」(表2)の横画の起筆にみられるような新たな用筆法が

加わり、高橋景羽墓表のような肉太で、左払いに勢いのある、揺るぎのない字形を確立する。（書風の確立という点のみだけで言えば、市原秋芳氏・魚住和晃氏の説に同調する。）

ところが昭和期に入ると詠士の書風は一変し、根津山洲先生墓誌以後の墓碑書はどれも左払いが短く、字形が著しく縦長になり、明治四五年に書かれた橋本君碑（詠士四五才）や、大正十年に書かれた高橋景羽墓表（詠士五五才）などは、背景となる古典が明らかに異なっている。しかも堕涙之碑と四竈孝輔墓誌には九成宮醴泉銘によく似た字形がたくさんある。

尚、『詠翁道話』に

私は五五才（高橋景羽墓表書丹）頃が進歩の一番著しかった時期でした。將に老境に入らんと心満ちていた時であつたからだ。

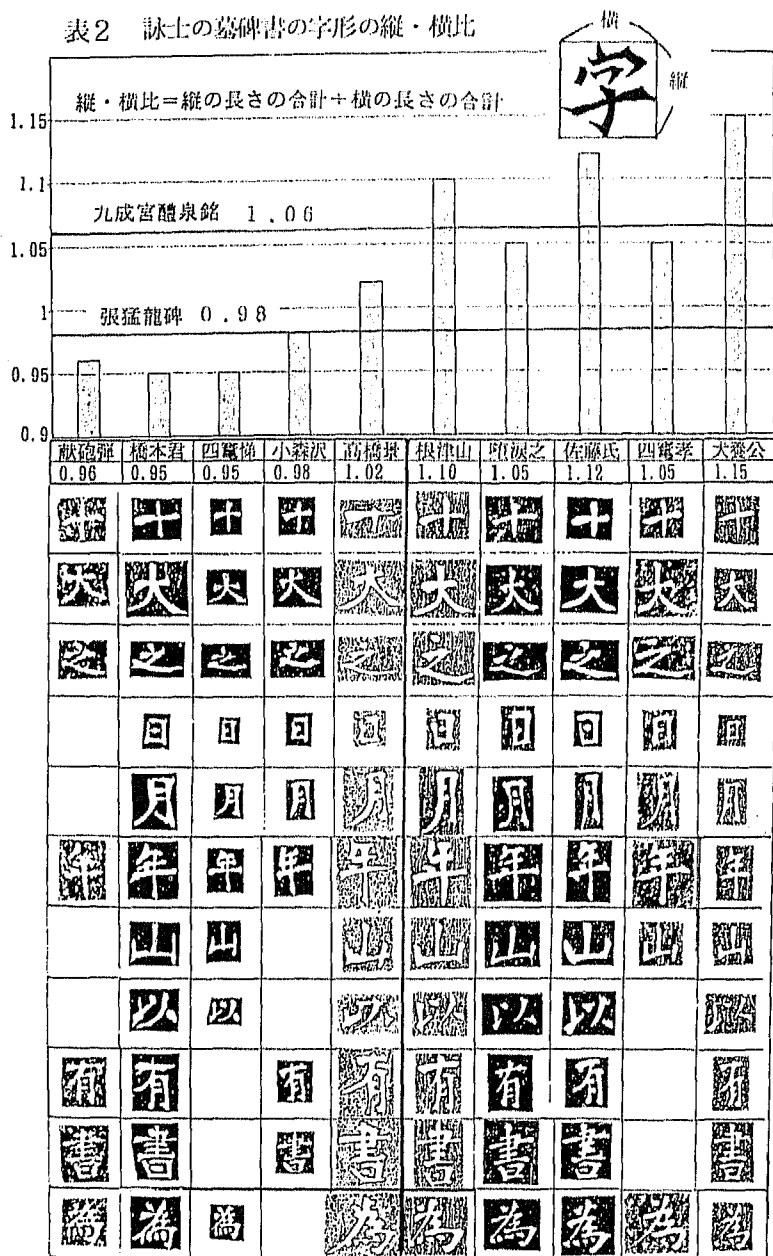
という一節がある。詠士の書と言えはいつも佐藤氏念祖碑のように『技量の高さからくるうまさ』に心を奪われがちであるが、これまで述べてきたように書作品における本質的な部分『線質の力強さ、文字の躍動、生命感（一本、一本の線からくる感動・驚き）』から言えば、高橋景羽墓表を中心とする大正十年前後のものが『一番優れている』と私は思う。

（てらお まさあき 長野県臼田高等学校教諭）



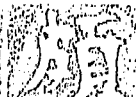
表1

墓 碑 書 名	縦の長さの合計	横の長さの合計	縦・横比	年 齢	
A 猷砲彈碑	450.85	471.95	0.96	30才	明治29年
B 橋本君碑	760.85	798.60	0.95	45才	明治44年
C 四竈梯夫墓誌	351.50	371.45	0.95	46才	大正元年
D 小森沢長政君墓誌	208.20	213.65	0.98	51才	大正6年
E 高橋景羽墓表	2150.10	2107.35	1.02	55才	大正10年
F 根津山洲先生墓誌	502.30	455.35	1.10	62才	昭和3年
G 堕涙之碑	1311.80	1246.50	1.05	63才	昭和4年
H 佐藤氏念祖碑	978.40	873.65	1.12	65才	昭和6年
I 四竈孝輔墓誌	715.90	683.45	1.05	72才	昭和13年
J 犬養公之碑	1960.50	1712.40	1.15	75才	昭和16年
※縦・横比＝縦の長さの合計÷横の長さの合計					

表2 詠士の墓碑書の字形の縦・横比





	永三才の草書書法開成	《バックーンとなる古典
21才	張廉卿に師事 ↓	《師風に徹し、張猛龍碑を習う》
28才	帰国 ↓	《帰国途中で中鋒の神髓を悟る》
30才	南大石包引石碑 ↓	張廉卿、張猛龍碑、隸書
45才	本居不三石碑 ☆用筆法の変化: ☆左払いの充実 ↓	乙瑛碑、孔宙碑、曹全碑 張猛龍碑
	小、石渠列と正女石書法志 ☆用筆法の変化: ☆左狭右広型の文字 ↓	張猛龍碑 龍門造像記 
53才頃	☆詠士流楷書の完成 ☆詠士流行書の出現 ↓	漢隸、張猛龍碑、高貞碑
55才	☆多彩な左払い ☆肉太で、揺るぎない結構 ↓	九成宮醴泉銘 顔真卿
56才	☆条幅作品の全盛期 ☆極濃墨のことが多い ↓	 
61才頃	☆縦長で流暢な書風に変貌する ↓	九成宮醴泉銘
62才	☆字形が縦長になる ☆左払いが短くなる ↓	九成宮醴泉銘
63才	☆細楷作品が多い ↓	九成宮醴泉銘
65才	☆行意を含んだこなれた楷書 ↓	九成宮醴泉銘
66才	☆犬養木堂の死 (以後、詠士の書に覇気がなくなる) ↓	九成宮醴泉銘
72才	☆軽度の半身不随症となる ↓	九成宮醴泉銘
73才	☆軽度の半身不随症となる ↓	九成宮醴泉銘
75才	☆大養公之石碑 (最晩年の労作)	九成宮醴泉銘

◇参考文獻

木堂先生遺墨集 (岡山県文化郷土財団)

『本論書人論 犬養木堂』 鮎島謙 『紅絲』五・十号

書道グラフ (犬養木堂の墨跡) 1 (採撰所) 一九六一年

書道グラフ (犬養木堂の墨跡) 2 (採撰所) 一九六一年

『墨』 (特集犬養木堂) (採撰所) 一九六一年

『日本人の記録・犬養木堂』 篠原 (昭和四十年刊)

『木堂清話』 篠原 (昭和四十年刊)

『犬養木堂傳』 篠原 (昭和四十年刊)

『六朝書道論』 中村新・生簡 (採撰所) 一九六一年

『康有為』 榎村 (採撰所) 一九六一年

『康有為と広芸舟艸』 榎村 (昭和四十年刊)

『広芸舟艸』 榎村 (採撰所) 一九六一年

『歴代書法臨文選』 (採撰所) 一九六一年

『康有為先生墨迹』 (採撰所) 一九六一年

『書論』第十九号 張廉卿特集 一九六一年

『張廉卿書作集』 魯鏡 (和装) 一九六一年

『木堂翰墨談』 (獨・魯鏡) 續編 一九六一年

新編『犬養木堂書簡集』 (岡山市郷土財団) 一九六一年

『詠翁道話』 魯鏡 (採撰所) 一九六一年

『書論』第二十三号 宮島詠士特集 一九六一年

『宮島詠士「人と芸術」』 魯鏡 (採撰所) 一九六一年

『張裕釗・宮島詠士師弟書法展覽圖録』 一九六一年

『梁荷的歴』 魯鏡 (採撰所) 一九六一年

『全書』三三〇号 (會本藝苑) 一九六一年

『全書』三九一号 (會本藝苑) 一九六一年

『全書』四六四号 (會本藝苑) 一九六一年

『全書』四八三号 (會本藝苑) 一九六一年

『全書』五〇二号 (會本藝苑) 一九六一年

犬養公之碑 (法帖) (採撰所) 一九六一年

佐藤氏念祖碑 (法帖) (採撰所) 一九六一年

詠而婦主人墨迹 續編 (採撰所) 一九六一年

根津山洲碑 (法帖) (採撰所) 一九六一年

宮島大八と二葉亭四迷 續編 (採撰所) 一九六一年

精翠園法書法論第六卷「段玉裁 述筆法」 一九六一年

書道研究「書法用語からみる中国書論」 魯鏡 一九六一年

『騷友』詠士書道の神髓 魯鏡 一九六一年

『騷友』宮島大八先生の書を論ず 魯鏡 一九六一年

『騷友』詠而婦主人宮島先生 魯鏡 一九六一年

『大亜細亜』第十一卷 魯鏡 (採撰所) 一九六一年

◇原拓 高橋景羽墓表 一九六一年

根津山洲先生墓誌 一九六一年

墮淚之碑 一九六一年

四竈孝輔墓誌 一九六一年

◇真筆 (未公開資料) 一九六一年

図17 杜甫詩 (習作) 一九六一年

図18 杜甫詩 四四七号×五七七号